

大伴家持の「月歌」

——不思議な月——

森

斌

はじめに

『竹取物語』では、かぐや姫が月を見ていると、竹取の翁が姫に「月の顔見るは、忌むこと」という。その月で罪を犯した女性がかぐや姫であると現在の竹取物語では設定されている。この月が風雅の対象というよりも、忌むべき内容のあることは、万葉集にまでさかのぼられる。月は、人に喜ばれる美しい存在だけではなかった。

大伴家持が季節に敏感であったことは、とりわけホトトギスと植物名をうたった歌などで知られる。暦でも立春と正月、立夏と四月、これらには特に鋭敏であった。万葉集で一番新しい天平宝字三年の歌（二十・四五一六）は、立春と元旦が重なる珍しい日であった。また、立夏でもホトトギスが鳴かない、或いは暦で夏の四月になったのにホトトギスが鳴かない、越中では都にある植物が少ないなどは、北国越中守時代に複数の機会で触れている。

月は国の異ならないものであるが、月読ともいわれて暦と深く関わった。そして、それは天体の月で夜を照らすと言うことばかりか、神の存在でもある。アマテラス、ツクヨミ、スサノオは、日本神話で三貴子とも呼ばれている存在であった。

ここでは、天体の月を対象にしているが、七夕歌などには難しい判断の例が多い。この考察は以下の三首（一五九

六番は二十歳代、三九八八は三十歳、四〇二九番は三十一歳のそれぞれ創作）を中心に不思議な月の存在を配慮してみたい。

大伴宿祢家持、娘子の門に到りて作る歌一首

妹が家の門田を見むとうち出で来し心も著く照る月夜かも（八・二五九六）

四月十六日夜裏遙かに霍公鳥の喧くを聞きて懷を述ぶる歌一首

ぬばたまの月に向かひてほととぎす鳴く音遙けし里遠みかも（十七・三九八八）

右一首は、大伴宿祢家持作れり。

森

珠洲の海に朝開きして漕ぎ来れば長浜の浦に月照りにけり（十七・四〇二九）

右の件の歌詞は、春の出幸に依りて、諸郡を巡行し、当時当所にして、属目して作れり。

なお、万葉の月歌の数については、下田忠氏は、百九十六首、また小野寛氏は百八十八例としている。^{（注）}ちなみに浅見徹氏は、引用した四〇二九番をも参考にして、「多くは夜の闇を照らす灯火の役割しか割り振られていない。あとは、満ち欠けて…東から西へ渡るもの…仲秋の名月を賞する態度はみられない」としているが、不思議な月の存在に触れない。^{（注）}

歌の引用は、基本的にＣＤロム版（塙書房）万葉集によるが、創作年次は、中西進氏著『大伴家持万葉歌人と生涯

(1から6)『(角川書店)に負う。

一 家持のきよき月

家持の「月歌」とは、天体の「月」の語を用いた歌をいう。万葉集では、「月」(つき、つく)「月夜」「暁月」「暁月夜」「夕月」「夕月夜」「三日月」「望月」「居待月」「月の舟」「月人(をとこ)」「月読(をとこ)」「ささるえをとこ」^(注)「白真弓」が天体の月をいう言葉である。様々な考えがあるのであるが、万葉集の月歌は、百九十四首とした。それらに基づき家持の月歌二十三首を年齢順に歌番号、そして歌詞を示す。

I 習作時代(八首)

十六歳	(天平五年)	九四	(振り放けて 三日月見れば)
十九歳	(天平八年)	一五九	(清く照りたる この月夜)
二十一歳	(天平十年)	三九〇	(まそ鏡 清き月夜に)
	天平十一年から十二年	七三六	(月夜には 門に出で立ち)
		一五〇七	(まそ鏡 清き月夜に)
		一五〇八	(望ぐたち 清き月夜に)
	天平十一年から十五年	一五九六	(心も著く 照る月夜かも)
	天平十二年から十六年	七六五	(月夜良み 門に出で立ち)

II 越中時代(十三首)

三十歳 (天平十九年) 四月十六日 三九八八 (ぬばたまの 月に向かひて)

三十一歳 (天平二十年) 二月、三月 四〇二九 (長浜の浦に 月照りにけり)

(同年) 三月二十六日 四〇五四 (燈火を 月夜になそへ)

(同年) 四月 四〇七二 (ぬばたまの 夜渡る月を)

三十二歳 (天平二十一年) 三月十六日 四〇七六 (月見れば 同じき里を)

三十二歳 (天平勝宝元年) 十二月 四一三四 (雪の上に 照れる月夜に)

三十三歳 (天平勝宝二年) 三月 四一六〇 (照る月も 満ち欠けしけり)

(同年) 三月二十日 四一六六 (暁の 月に向かひて)

(同年) 四月三日 四一七七 (夕さらば 月に向かひて)

(同年) 四月 四一八一 (さ夜ふけて 暁月に)

(同年) 四月九日 四一九二 (夕月夜 かそけき野辺に)

(同年) 四月十二日 四二〇六 (この浜に 月夜飽きてむ)

三十四歳 (天平勝宝三年) 八月 四二五四 (天地 日月と共に)

III 少納言時代(二首)

三十六歳 (天平勝宝五年) 七月 四三一一 (うら待ち居るに 月傾きぬ)

三十八歳 (天平勝宝七年) 八月十三日 四四五三 (清き月夜に 見れど飽かぬかも)

月歌では、習作時代にほとんど「月夜」を用いていながら、越中ではほぼ「月」が用いられる。その月と結びつく代表的な詩語として、さやか、きよし、或いは照るなどが万葉の月歌にある。まず、「さやに、まさやかに、さやけし」などの「さや」系と「きよし、きよむ」などの「きよ」系に二区分して配慮する。元々は「さやけし」は、音と関わる。「きよし」の語源は不明であつても、光と関わりがありそうである。

家持の月歌は、「さやか」「さやけし」「さやけき」という言葉を修飾語に選んでいる歌がない。清き、清くという月が五首、照る、照りという月が五首、そして清く照りたる月が一首である。そこには傾向もあつて、ホトトギスと結びつく月に向かって鳴くということでは、「照る」という形容が月に普通用いられるので、照る月は越中時代の作品に多い。それに対して、習作時代と少納言時代には、清き月夜という表現が目立つ。万葉一般では照る月が圧倒的であるので、その点でも個性的ではある。そこで参考にしたのが、大伴の名前にどのような修飾語を用いているかである。

家持は、その歌で丈夫たる「大伴」であると繰り返しうたう。大伴古慈斐が讒言で拘束された。三十九歳の天平勝宝八歳六月に古慈斐事件の一連で、家持は「あたらしき 清きその名」（四四六五）と長歌でいい、二首の短歌でも「明らけき名に負ふ伴の緒」（四四六六）「さやけく負ひて来にしその名そ」（四四六七）という。さらに病にあつて無常を意識した歌二首でも山川を「さやけき見つつ」（四四六七）といって悟りの道を表し、歩みを「清きその道」（四四六八）とうたい悟りを表している。ここでは、あきらかにはば同じ意味で「さやけき」「さやけく」と「清き」を用いていて、「明らけき」も重なっている表現である。

ちなみに古来から第五句がなかなか定訓を得られない歌がある。

わたつみの豊旗雲に入り日見し今夜の月夜清く照りこそ（清明己曾）（一・十五）

引用した中大兄の歌は、六六一年正月に百済救援の航海でうたわれた。月夜を第五句で原文が「清明」としている。この表記をどう読むか、古来十数種の説がある。しかし、近代の一般的には「さやにてりこそ」（岩波大系、和歌文学大系）「まさやかにこそ」（沢瀉注釈）「さやけかりこそ」（全集、中西全訳注、岩波新大系）「さやけくありこそ」（新潮古典集成）などとあつて、そこには現代の注釈書にはある傾向がある。^{注4}即ち、月の光を「さや」という竹の葉ずれなどに語源を持つ「さやけし」「さやに」で訓む現代の研究である。万葉の一般的には、月の光は、「きよし」という傾向があり、『時代別国語辞典上代編』には、「主として視覚についていう。川および、河原・浜・なぎさ等水辺の描写に用いることが多く、月光に関して用いる場合がこれにつぐ」と説明されている。ところが最近の研究と異なる訓が阿蘇瑞枝氏である。^{注5}万葉集のさやけしの世界とは隔たりがあるとし、これまでの訓として最善のものとして「きよくてりこそ」を支持したい、と述べる。理由の一つに「清明心」（敏達十年二月）「清白心」（斉明四年四月）が「さよくあかきころ」と訓まれたことを踏まえている。

野田浩子氏は、「きよし」「さやけし」「ま（さ）さや（か）」に^{注6}と三分類して万葉の用例を表にしている。野田氏と異なるが、「まさやか」も「さや」系として一括して二分類として調査した。「さや」系と「きよ」系ということであるが、月と結びつく例を調べると、さや系が七例、きよ系が十五例である。万葉集中で用いられたさや系の歌語を持つ歌は、五十首ほどであり、きよ系の歌語を持つ歌は、八十首ほどである。当然それらの用例には、例えば九〇七番の笠金村、一〇〇五番の山部赤人、一七三七番の兵部川原、三三三四番、三九九一番の家持、四〇〇三番の伴池主は、一首中で両系統の歌語を用いている。そして全てに共通するのは、川の水音に関わっていることである。

古事記歌謡と日本書紀歌謡には、「さや」系の言葉があつても、「きよ」系の形容語がない。また、仮名書き例としては、万葉集には案外確実に古い初期万葉の例がない。ところが家持の月表現は、「まそ鏡清き月夜にただ一目見するまでに」(二五〇七)、「望ぐたち清き月夜に」(一五〇八)、「まそ鏡清き月夜に」(三九〇〇)、「清き月夜に見れど飽かぬかも」(四四五三)、「清く照りたるこの月夜」(一五六九)であつた。

一方万葉一般では、「さやかに」「さやけかり」「さやけく」「さやけさ」「さやけし」「さやかに」と月の結びつきがあり、七首を数える。家持もさや系の言葉は七首に用いているが、案外山川という一般的なものもあるが、「君が上はさやかに聞きつ」(四四七四)、「さやけく負ひて来にしその名そ」(四四六七)、「春へとさやになりぬればど」(四四三四)とする用い方もある。

繰り返すが「きよし」とは視覚的な色合いの強い言葉である。月の光でもさやかよりも用例が多いことでもそのことは知られる。例えばきよ系の形容をもつ月歌十五首ある中で、「きよき月」という万葉歌は八首ある。きよき「ありそ」(一首)「いそ」(一首)「かはせ」(二首)「かはら」(七首)「かふち」(五首)「しらはま」(二首)「せ」(八首)「な」(二首)「なぎさ」(三首)「はまへ」(三首)「御田屋」(一首)「やまへ」(一首)「ゆふべ」(二首)などの歌語がある。一般的には川の形容にもさや系の言葉と同様に用いられている。或いは海辺も同様に水辺ということになる。その中では特殊なのは、家持に「きよきその名」という例が二首あることである。家持は、清き月夜、清き瀬、清き河原なども用いているが、名前が輝く意味の形容にもしている。

さて、山紫水明の地であり、聖地の存在としての吉野がある。そこでは川、山などの表現が豊かである。まず、長歌による吉野賛歌の伝統は、柿本人麻呂(一・三六から三九)、笠金村(六・九〇七から九一二、九二〇から九二二)、山部赤人(六・九二三から九二七、一〇〇五、一〇〇六)、車持千年(六・九一三から九一六)、旅人、そして大伴家持

(十八・四〇九八から四一〇〇) という史的展開になる。

家持は、吉野行幸を予想して、予め創作した。歌にはその前後の作に日時が記されていて、天平感宝元年五月十二日と十四日との間に作られていることがわかる。吉野行幸は持統天皇が有名であるが、聖武天皇も試みた。養老七年の皇太子時代には、笠金村が、ある説では車持千年もうたっている。神龜二年の聖武天皇の行幸には、笠金村と山部赤人が吉野賛歌を作っている。金村は「山川を 清みさやけみ」(九〇七)「川の瀬の 清きを見れば」(九二〇)、千年は「清き河原を 見らく惜しも」(九一三)、赤人は「川なみの 清き河内そ」(九二三)「久木生ふる清き河原に」(九二五)と川の形容を中心に「きよし」系の言葉が多用されている。一例金村に「さやけみ」があるが、ほとんど人麻呂に始まる「山川の 清き河内と」(一・三二六)という類似の言葉が用いられ、金村・赤人はさらに叙景的な内容の発展となっている。ところが、旅人は、少し様子が違う。「さやけし」一点に集約して、長久に続く吉野を讃え、天皇賛美としている。とくに反歌は、「なりにけるかも」は、志貴皇子の「春になりにけるかも」(八・一四一八)とある春を連想させる吉野「象の小川」の新しい発見美である。また赤人は、天平八年夏六月に吉野賛歌(六・一〇〇五、一〇〇六)を作る。神龜二年(七二五)から二十四年後に、また天平八年(七三六)からでも十三年後の天平感宝元年(七四九)五月に、家持は吉野賛歌を作っている。聖武天皇から孝謙女帝の時代が始まるのは、同年七月である。

家持は、三十二歳の天平感宝元年五月に陸奥国から出金した折りに、詔で大伴が讃えられたことを祝う歌(十八・四〇九四から四〇九七)を作るが、そこに「大夫の 清きその名を」といい、一例だけ「清き」を用いている。ところが、吉野賛歌では、伝統的な「見」の復活を試みながら、旅人や赤人などが試みた叙景的な発展を試みていない。また、「清し」「さやけし」も使わない。中西進氏は、継続を表す言葉の多用、そして「君臣唱和」の主題を説明して

いる。^(注7) 昔の栄光を現在も夢見ていたのである。さや系ときよ系の形容にも関わるのが「名」である。ところが吉野賛歌では「もののふの 八十伴の緒も 己が負へる 己が名負ふ負ふ」(四〇九八)とうたい、人麻呂から赤人までの吉野賛歌においてこのことは誰もが試みなかったこの名前に対するこだわりが家持にはある。そもそも憶良にもあった。

山上臣憶良、沈痾りし時の歌一首

士やも空しくあるべき万代に語り継ぐべき名は立てずして(六・九七八)

右の一首、山上憶良臣の沈痾りし時に、藤原朝臣八束、河辺朝臣東人を使はして疾める状を問はしむ。ここに、憶良臣、報ふる語已に畢り、須くありて涕を拭ひ悲しび嘆きて、この歌を口吟ふ。

辰巳正明氏は、憶良の名前が揚がることに拘っていることを、儒教の孝行を配慮して中国思想に向かい合った憶良の人間性と判断された。^(注8) それは、山上憶良がその親に誉められる立身出世であり、加えて物質的にも、社会的にも恵まれることであり、現代人の個人に近いものを含むのであろう。

家持の場合はどうであろうか。陸奥国で金が発見された時に、宣命があった。天平二十一年四月一日であったが、そこでは大伴氏の功績が讃えられている。そこで天平感宝元年五月十二日に「陸奥国より金を出せる詔書を賀ける歌」(十八・四〇九四から四〇九七)を作る。長歌(四〇九四)には、ことさら名前、氏に関する言葉が多用されていて、「その名をば 大久目主と」「大伴の 遠つ神祖の」「大夫の 清きその名を」「大伴と 佐伯の氏は」「人の子は 祖の名絶たず」という具合である。

家持の名とは、大伴氏であり、先祖から誇りとしてきた職業をも含んでいる。それを、家持は「清き名」と形容しているのである。「さやけし」「あかし」「あきらけし」「うまし」「よし」などの形容もあるのに、「清き」という。

ところが天平勝宝八歳（七五六）には、族を喻せる歌では、「あたらしき 清きその名ぞ」「虚言も 祖の名断つな 大伴の 氏と名に負へる 大夫の伴」（四四六五）、或いは「明らけき名に負ふ伴の緒」（四四六六）、「古ゆさやけく 負ひて来にしその名ぞ」（四四六七）ということになる。「あたらし」「清き」「明らけき」「さやけく」等の形容を伴わせて、先祖から誇られている大伴の名に拘る家持が居る。そこにあるのは、山上憶良が物質や健康を含めて個人的に丈夫を願っているのに、先祖と共通に生きる大伴の名前を尊ぶ家持が居た。

病に臥して無常を悲しび、道を修めむと欲ひて作る歌二首

うつせみは数なき身なり山川のさやけき見つつ道を尋ねな（二十・四四六八）

渡る日の影に競ひて尋ねてな清きその道またも会はむため（同・四四六九）

引用した二首は、憶良の影響もあるが、父旅人の大宰府での妻の死とさらに凶事が重なった世間空虚を踏まえつつ反発しているのに対して、家持も思想とは裏腹に千年命を願う世間への執着を示している。家持は、三十二歳の天平感宝元年五月に陸奥国から出金した折りに、詔で大伴氏が讃えられた。そこで名前の由来を誇り、そしてそれを共有する現在の太伴氏を構成する家持がいることを誇るのである。憶良が物質や健康を含めて丈夫を願っているのにたいして、大伴という先祖と共通に生きる名前の太伴家持が居る。

家持の月歌は、「きよき」「きよく照り」が用いられていても、さや系の修飾語がなかった。しかし、丈夫たる大伴

の名では、さやけき、きよき、どちらも用いている。家持の二十三首の月歌は、光と語源的にきよ系と照ると言う言葉のみ使用しているのであるから、月の光の形容に拘りを認めたい。

佐々木健一氏は、次に引用した、

ぬばたまの夜のふけぬれば久木おふるきよき川原に千鳥しばなく（六・九二五）

の赤人歌には、光を感じるとして、『清い』の感性は、月の光とともに川の流れを復元し、『清き河原』は自ずから換喩となる」という。^(註9)

家持は、月の光に視覚として敏感に対応していたのである。その結果として佐々木氏のいう換喩として「きよし」という形容につながり、月が視覚的にきよく照らすということになる。

二 月夜の風狂

万葉集にも月光によるもの狂いがある。月が風雅の対象というよりも、忌むべき内容のあることは、万葉集にまでさかのぼられる。月は、人に喜ばれる美しい存在だけではなかった。それは次の二首が証左になる。

大伴の見つとは言はじあかねさし照れる月夜に直に逢へりとも（四・五六五 賀茂女王）

長谷の弓月が下に我が隠せる妻 あかねさし照れる月夜に人見てむかも（十一・二三五三 人麻呂歌集）

万葉集で枕詞「あかねさし」が月にかかる例は、引用した二首だけである。そもそも、「あかねさす」は、「日」「昼」に結びつくが、ここの「あかねさし」は「照れる」に接続しているのみである。この太陽の光を形容する言葉が、夜空に輝く月と結びつくので、二首のみなのである。五六五番は、賀茂女王の歌であり、茜色に照る月とは、尋常な状態ではないので、実景というよりも何らかの寓意を含んでいるのであろう。もし、人麻呂歌集二三五三番を参考にするのであれば、人を憚っているのであるから、この隠した妻は私ではない、他者との逢瀬を暗示していることになり、茜色の月の異様な状態と重なる。人を常識的に行動させない月ということである。

次に芭蕉の風狂について触れる。風狂については、次のように理解したい。すなわち、芭蕉の俳諧として風狂の精神とは、辞書的に纏めれば風雅に徹した人ということである。ある社会常識に照らして風雅に徹していて、芭蕉はそれを理論と実践で試みたことになり、その精神のよりどころについては種類の考えがあることになる。但し、ここで大事なことは、風雅に徹した、或いは仏教であれ、老荘思想であれ、尋常でないことを風雅として求めていることを、風狂と言っている、と考える。^(註10)花鳥風月は勿論のことであるが、仏教であれ、老荘思想であれ、尋常でないことを風雅に徹して求めているということであれば、風狂とは家持もその心を持っていたのではないか。

次の歌も風狂と呼ぶべき内容がありそうである。月が美しく輝いているから、門田を見たくて来た、という一首である。月夜に妹に逢うのは当然であるが、何故妹ではない門田であろうか。門田も勅撰三代集には全く登場していない。中世には歌語として復活するのであるが、奈良貴族はまだ都市化していないので、田植えを門田でおこなったこともあったのであろうか。それにしても恋歌としては不思議である。

大伴宿祢家持、娘子の門に到りて作る歌一首

妹が家の門田を見むとうち出で来し心も著く照る月夜かも（八・一五九六）

家持は、恋歌を贈ったり、返歌が贈られた女性には、妻大嬢、山口女王、大神女郎、笠女郎、藤原女郎、中臣女郎、紀女郎、平群氏女郎、安倍女郎、さらに河内百枝娘女、巫部麻蘇娘女、日置長枝娘女、栗田女娘女の名前が知られる。ところが名前の知られない「娘女」と「童女」もいた。情熱的な恋歌を家持にうたうのは、笠女郎が著名である。結局最後には、次のような歌を、笠女郎が家持に贈ってくるのであるから、片恋であつたらしい。

相思はぬ人を思ふは大寺の餓鬼の後に額つくごとし（四・六〇八）

家持は、概して女郎と名前が付く恋歌で情熱的なものが少なく、相手に言葉で嘯みつかれたり、挑発されたりしていても、歌の内容は限りなく冷静である。しかし、娘女という女性に対しては複雑な一面を見せている。家持の習作時代の恋歌は、巻四と巻八に収録されている。相手の名前の知られない歌は、巻四に五群として載せられている。名前の知られる河内百枝娘女が家持に贈った二首がある。

はつはつに人を相見ていかにあらむいづれの日にかまたよそに見む（七〇一）

ぬばたまのその夜の月夜今日までに我は忘れず間なくし思へば（七〇二）

七〇一番からは恋の成就が感じられるが、七〇二番からは、逢った夜の月が忘れられないという。恐らくこの後の贈答がないので逢瀬も一度だけであつたのかも知れないが、情緒的な内容が感じられる。また、童女に贈る歌があるが、ここの童女とあつても、その言葉通りとも思えないのは、なかなか家持への返歌で才覚を見せているからである。

大伴宿禰家持、童女に贈る歌一首

はね縵今する妹を夢に見て心の内に恋ひ渡るかも（七〇五）

童女の来報ふる歌一首

はね縵今する妹はなかりしをいづれの妹そそこば恋ひたる（七〇六）

家持が童女としているが、その童女の返歌からはそれなりの年齢であろう。また、童女それ自体が女性の関心を買うための方便でもあり、返歌に「いづれの妹そそこば恋ひたる」とあつて、あなた家持だけが恋していると突き放している。

しかし、巻四にある、名前の知れない娘子に対してはしょうしょう勝手が違うようである。中西進氏は、「おとめたちとの恋」として、一（六九一、六九二）、二（七〇〇）、三（七〇五）、四（七一四から七二〇）、五（七二二）という群に区別している。^{〔注1〕}家持は娘子に歌を贈ったが、童女（七〇六）を除き、その返歌は記されていない。そんな娘子の門で退散した歌がある。

大伴宿祢家持、娘子の門に到りて作る歌一首

かくしてやなほや退らむ近からぬ道の間をなづみ参る来て（七〇〇）

家持は、武人であるから、颯爽として馬で女性宅に通いたかったのであろう。その様子を彷彿させる歌もある。

千鳥鳴く佐保の川門の清き瀬を馬打ち渡しいつか通はむ（七一五）

七一五番が理想であつたが、なかなか郎女達とは勝手が娘子は違うらしい。そこで小野寛氏が指摘する「名を記さぬ『娘子』への入れられぬ恋」であつたという想像も客観性をもつてくる。^{（注12）}即ち、内舍人であり、佐保大納言家の大伴家持であっても、宮中で働く女官や女郎と呼ばれる高貴な、或いは名門女性とは恋の思いに違いがあり、家持のいい意味でのエリート意識が障害になるのであろう。

七〇〇番は題詞に「娘子の門に到りて」とあり、この娘子との逢瀬を諦めているが、それに対応する歌が巻四にある。

大伴宿祢家持、娘子に贈る歌三首

一昨年の先つ年より今年まで恋ふれどなぞも妹に逢ひ難き（七八三）

現には更にもえ言はじ夢にだに妹が手本をまき寝とし見ば（七八四）

我がやどの草の上白く置く露の身も惜しからず妹に逢はざれば（七八五）

恋が成就させるためには、この当時でもさまざまな方法があつたであろう。贈り物としての歌もその手段の一つであるが、どうしても適わない恋であるならば、あきらめることも大切である。ところが、「我がやどの草の上白く置く露の身も惜しからず」(七八五)とは、比喩であつても庭にある草葉の置く露のごとく消える命であつても惜しくないという。実際に露が置く草場として人間の肉体を野宿させたのは、山部赤人である。「山部宿祢赤人の歌四首」(八・一四二四から一四二七)から最初の一首を引用する。

春の野にすみれ摘みにと来しわれそ野をなつかしみ一夜寝にける(八・一四二四)

萼を摘む目的については、近代の代表的な注釈書では、次の如くである。窪田評釈は、萼摘みを衣を摺る染料(略解)とする。土屋私注・古典全集・新編全集は、萼摘みを食料のため(代匠記)とする。武田全註釈は、萼つみを花とする。沢瀉注釈は、萼を摘んで何の用途に当てると言うのではない、と判断しているし、井手全注・中西口訳注は、花の美しさを愛でる、という理解である。同様に伊藤釈注は、花への愛好を関心においている、とする。

そこで考えたいのは、「摘む」の意味である。万葉から用例を探ると十九首が参考になる。十九首の用例では、食料とする植物を摘むことが圧倒的である。例えば花を摘む例としては、①「莫告藻の花 採むまでに」(七・一二七九)②「韓藍の花を誰か採みけむ」(七・一三六二)③「紅の末摘花の色に出でずとも」(十・一九九三)④「春の野に 萼を摘むと」(十七・三九九三 池主)の四首が取り上げられる。①寄物発思の歌では、莫告藻の花とあって、これは海草であつて陸上の植物に類似するが咲かない。花が咲かないのであるから、花を摘むことが出来ないものであつて、これを永久に逢えることに結びつけて表現としている。「なのりそ」即ち、名前を言うな、という意味を配

慮した類型的な発想であるが、形式的であつても花を摘む例ではある。また、②譬喩歌の花を摘む例は、花汁を染料とする鶏頭を女性に譬えて、女性をものにする意味とする。花を摘むのは女性をものにするようになるのであつて、鑑賞の為ではない。これらの用例からは、花を摘むことは、花に対する鑑賞に基づくことはない。③一九九三番は、これも花を染料にする紅花を摘むという用例である。次に④堇を摘む例とするのは、唯一大伴池主の作にある。池主の例では、明らかに赤人の歌を踏まえていて、女性が「堇を摘む」という。

そもそも摘むと言へば、万葉歌では山菜を摘むのが圧倒的である。さらに山菜であれば、摘む人とは一般論として女性である。これら四首中で「春の野に」に対応するのは、一四二七番であり、ここでは「春菜つまむ」とある。「春の野に」の歌でも、これは明らかに堇摘むのは若菜とする食料のためである。赤人の作とあつても、歌で言うところの摘む人とは女性と考えて良いのであるまいか。また、第三句にある「われ」とは、女性を指しているのである。若菜摘みが女性の仕事であつたためであらうことから、女性の立場で詠作している可能性が高い。岡田喜久男氏は、堇摘みを女性の仕事と判断しているが、桜井満氏の説では、スミレの歌を冒頭とする四首（一四二四から一四二七）を絶句の起承転結の手法に適った構成であるとして、第一首は食べ物としての堇摘みを、第二首は春の景としての桜花を、第三首は一転して雪を、第四首は雪のため若菜摘みが出来なくなったことを、それぞれ詠んだとする。^{注13}

第一首（一四二四）は特別に難解な言葉があるわけではないのに、意味が通じない箇所がある。それは、「野をなつかしみ一夜寝にける」という表現である。これは類似表現が無い。しかし、比較したい表現としては、「一夜のみ寝たりしからに」（九・一七五一）と一晚寝たら風景が変わった言う高橋虫麻呂の例、「一夜一日も安けくも無し」（十二・二九三六）と一日一夜安らかでないと言う例、「一夜の故に」（十八・四〇六九）と一夜で変わるのに、また

一晚先立つ故にと言う能登乙美の例など、一晚中安眠できない、一夜思い続けた、等が一般的な例である。また、歌垣であれば事情が異なるであろうが、野遊びであれば昼間に行われたであろうから、そのまま夜を過ごしてそこで寝てしまうとは、尋常のことと思えない。

いささかに思ひて来しを多の浦に咲ける藤見て一夜経ぬべし（十九・四二〇一）

引用した久米広縄歌が比較的に近いのであるが、野宿について「べし」とあって、そうしたわけでなく、あくまで理想である。女性に仮託したとも考えられるが、しかし赤人は現実に野宿したというのであるから、全くその意味で類型がない。野宿することが珍しいと思えないが、しかし一夜眠られない、思い続けた、夜毎夢見ること等は、表現として万葉歌に登場している。「なつかし」いから一晚野で寝てしまったというのは、恋のため眠れない、あるいは一晚安眠できない等とは全く異質な内容がある。

なつかしくは、心惹かれることをいうのであるが、ここでは春の野を対象にいうのであるから、去りがたく此処に居たい気持なのである。とすれば春を謳歌する気持が一晚の野宿にまでなったと言えそうである。春野の遊びの後、さらにその野に惹かれているのである。此処にこの歌の根本がある。春を謳歌する、堪能するということではなく、世間から没我になりたくて野宿しているのであり、中西進氏の言う「風狂」として理解するべきである。（佐々木）

家持は、人を狂わせる月の光に誘われて門田を見に来たというべきであろう。家持も女郎と異なり、娘子との恋は、勝手が違っていた。その異質な違いが妹に逢うから妹の門田を見る風狂な行動になっていたのである。「門田を見たい」とは、旅という範疇なので質が異なるが、江戸の芭蕉が鳩の浮巢を見るために遠い琵琶湖まで出かけるのに通じ

る心情に思える。さらに類似するのは、同じ万葉歌人として懐かしいので野宿してしまった赤人に近い。

妹が家の門田を見むとうち出で来しも著く照る月夜かも（八・一五九六）

風狂の対象としては娘子のいる門田を見に行く歌以外にも、霍公鳥歌に花鳥風月のな月と異なる不思議な月を意識させるものがある。それは、越中でとりわけ鳴く鳴かないを含めて、ホトトギスに執着しているからであるが、月に向かって鳴くホトトギスを考察する。

三 月に向かって鳴くホトトギス

月とホトトギスの組み合わせは、次に引用する大伴家持の弟書持歌が嚆矢であった。

わが屋戸に月おし照れる霍公鳥心あらば今夜来鳴き響もせ（八・一四八〇）

中西進氏が家持の卷八・一四七八番からの一連を天平四年から天平九年という初期の作品としている。^(注15) もちろんホトトギスと月の組み合わせは、初出が弟書持であるが、家持もうたい始める。

さて月がうたわれていないが、引用する霍公鳥の歌は注目したい。

夏山の木末の繁に霍公鳥鳴き響むなる声の遙けさ（八・一四九四）

「鳴き響むなる声の遙けさ」という下句には、家持の人生を感じさせる陰影がある。その陰影は、遙かであるという具体的に指摘できる。ここである遙かとは、現実的な空間というよりも、過去と現在を対比させるものであり、それを死と生ということに置き換えることも出来る。即ち、参考としては湯原王の卷八にある、

秋はぎの散りのまがひに呼び立てて鳴くなる鹿の声の遙けさ（一五五〇）

が、牡鹿が牝鹿を呼ぶ距離の遠さであるとともに、散るはぎに自然が冬に向かっていることを示し、さらに声の遠さから鹿の命が減び行く気配をうたったものであることによる。

家持の一つの転機としては、妾の死と大嬢との結婚がある。家持は、天平十一年の秋には大嬢と結婚していた、と考えられる。その時期に想定できる長歌がある。家持の長歌としては、処女作であるかも知れない。一五〇七番で、霍公鳥、橘の花、月夜の暁という場面を設定して、霍公鳥が花を散らかせてしまったのでたちはなの花を「術を無み攀ちて手折りつ 見ませ吾妹子」とうたう。

むしろ主題は、妹子に見せたかった橘の花である。この長歌は、霍公鳥よりも橘の花が主題であるが、もう一首長歌が坂上大嬢に贈られている。一六二九番のそこでも花が妹を連想させるといふ。霍公鳥の歌には、優れた作品を初期に残しながら、天平十一、二年頃は、むしろ花に譬えて妹を連想させ、霍公鳥もその借景の役割である。ところが、また霍公鳥が主題に戻ることがあった。越中守の天平勝宝二年家持三十三歳が最高の歌作を誇る。六十六首の霍公鳥

歌を生涯で創作しているが、越中時代の五年間でも四十六首でありながら、半分の二十三首を天平勝宝二年にうたっている。

ホトトギス歌も独詠に注目すればますます古を恋うる鳥の歌の性格が強まる。天平三年七月の父旅人の薨去、天平十八年九月の弟書持の突然死、さらに天平十一年六月の亡妻が恋う対象であると考えられる。

近親者の死、とりわけ妻の死は天平十年内舍人に任官したばかりの大伴家持にとって痛手であった。ところが、天平十一年以降十二年頃までは、亡妻を挽歌で悼みながら、さらに同時並行的に妻大嬢との相聞歌を創作している。絶望と希望を共存させていくたくましさがこの二十二歳の官人にはある。ところが、繊細なところは、越中時代に共存を許さなくなっていた。密かな亡妻への追慕は、大伴坂上大嬢の存在を希薄にさせている。その主たる原因は、大嬢の作歌能力のなさにも起因するのであろうが、家持の独りに基づく悲嘆が年とともに増幅されていったためではなかったか。

たまたまであつたが、天平十六年安積皇子薨去までは皇親政治に絶好の機会であつた。藤原四兄弟は天平九年に病死した。千載一遇の機会であるから、大伴という一族の期待もはなはだ大きかつたであらう。大嬢との再会も政治的なものであつて、偶然よりは意図的な気がする。一度は縁のない存在であつたのであるから、父旅人の妹である坂上郎女のみならず、大伴氏全体の意向もあつたのではないだろうか。大伴一門の思惑に揺れ動かされる青年の苦悩もあるはずである。家持の亡妻挽歌は、冷静な気持ちを維持しつつ、そして人麻呂に始まる亡妻挽歌の伝統を庶幾しようとするものである。しかし、悲嘆は決してこの挽歌で忘れることができなかつた。越中でのホトトギス歌を独詠で数多くうたつたこと、七夕歌に対する共感がそれを物語る。

夏から秋にかけては、夏六月の妻、秋七月の父、秋九月の弟、それぞれの死と季節がかかわる。夏のホトトギス歌、

秋の七夕歌を参考にして亡妾の影響を考えてみることも出来る。そもそも大嬢の越中での存在が極めて薄いことがある。大嬢が越中にいることが確認できるのは、天平勝宝三年三月からであり、それ以前の足かけ五年間は京にいたのである。越中での存在も大嬢の要請で母坂上郎女に家持が歌（十九・四一六六―四一六八）を贈ったので、たまたま彼女の存在が知られるのである。

それに対して家持は、天平十三年のホトトギス歌で亡妾を偲び、さらに七夕歌ではそれとなく織女に亡妾を重ねてうたっている。^{注16}

ちなみに七夕伝説に対する興味が家持にはあった。牽牛と織女が一年に一夜しか逢えないという悲劇、或いはエキゾチックな宮中儀式としての興味、天の川と日本神話の安の川との結びつき、日本に珍しい天空の説話であること等が考えられる。しかし、家持の七夕歌が首尾一貫して独居述懐であるのは、これまでに指摘されていない内容を考えていいのではないかと、越中での創作である天平勝宝元年以降七夕歌では、亡妾が追想されているのであろう、と考える。

家持は、挽歌（三・四六四）でナデシコに亡妻を見立てていた。同様に天平勝宝六年の七夕歌（四三〇六―四三一二）には、第二首から第四首まで、「花」「初尾花」「和草」がうたわれているが、それらが亡妾を連想させているのである。花になぞらえるのは、亡き妻なのである。越中守時代以降ますます坂上女嬢に対するものとは考えがたいのであり、亡妾への思いが仮託されている。越中時代の七夕二群（四一二五、四一二六・四一六三）には、「思ほしきこと」（四一二五）が巻十三の二三三六番挽歌で用いられていて、それ以外の三例が全て家持であること、そして「枕かむ」（四一六三）という歌語が旅人の作「梧桐の日本琴一面」（五・八一〇）の夢の乙女と重ね合わせる、旅人への拘りがあつたし、架空の女性でもある。これらは、亡妾が七夕の織女と重ねられていることにも関わっ

ている。七夕歌でも亡き人の思いを重ねるのであるが、ホトトギス歌でも家持は亡き人を偲ぶのである。弟のみならずホトトギスは、天平十一年に亡くなった妾の霊でもあったのであろう。

越中で独り居てホトトギス歌を作る家持は、越中以前にホトトギスで亡妻の形代としていたように、天平十九年以降のホトトギス歌には、亡弟書持を踏まえて詠んでいる。そして、亡弟・亡妻がホトトギスに仮託されてホトトギス歌がうたわれているのである。越中の七夕歌などを参考にすれば、亡妾の影もホトトギス歌にあっても当然のことである。

家持の霍公鳥歌の一般的な特質は、常識として鳥が鳴くということである。そして、特殊なのが月に向かって鳴く霍公鳥の存在である。さらに家持三十三歳の四月には、次の代表的なホトトギス歌を作るのである。

四月十六日夜裏遙かに霍公鳥の喧くを聞きて懷を述ぶる歌一首

ぬばたまの月に向かひてほととぎす鳴く音遙けし里遠みかも（十七・三九八八）

右一首は、大伴宿祢家持作れり。

ホトトギスが夜に鳴いていることも孤独な心情を刺激するのであろうが、ここにあるのは、鳴き声を「音遙けし」と感じる家持の感性である。

もちろん大伴家持だけがホトトギスの鳴き声を「遙けし」とうたったのではない。家持自身も嘗て卷八の夏雑歌に収められている歌で「鳴き響むなる声の遙けさ」（一四九四）と言っていた。また、湯原王が鹿の鳴き声にも「遙けさ」（一五五〇）と言う。

家持は、それを「声」(こゑ)とせずに「音」(おと)として捉えたところに、卷八の自作歌とも異なる情緒をもたせている。声とはまさしく鳴き声の意味であるが、音であれば松であれ、笹であれ、或いは動物の鳴き声でもいい。動物を主という声よりも、音は広い自然に発する意味で用いる。家持は、声とせずに音として表現したのは、どうしてであろうか。

今夜のおぼつかなきに霍公鳥鳴くなる声の音の遙けさ(十・一九五二)

引用した歌を参考にすれば、声を音として捉え直して遙けさを感じているのは、「今夜のおぼつかなき」ことである。ホトトギスの声をその声として捉えれば、ごく自然であるが、それをさまざまな自然界の音としている状況があつて、「声の音」なる語も生まれているのである。家持は、さらに霍公鳥の声を、声という段階を経ないで直裁的に音というレベルで捉えている。即ち、自然の中のさまざまな音として鳴き声を捉えるあまりに鋭敏すぎる心情であるが故に、おぼつかない状態にいたつていて、さらに音を遙かなものとしていたからである。家持のおぼつかない心情がホトトギスの鳴き声を遙かな音と感じているのである。

ホトトギスとは、そもそも死者の鳥である。従つて、ホトトギスをうたう歌は、人間の死の影を色濃く含み持つている。鹿にせよ、ホトトギスにせよ、声、或いは音が「遙けし」というのは、作者がそれらの動物に死の気配を敏感に感じているのである。だから、そのホトトギスと鹿に死の気配を感じた家持も湯原王も声や音を遙かなものとした。そこで月にある「をち水」をうたう興味深い和歌を引用する。

月説は、月と同じ用例もあるが、一般的には月と異なる。それは、万葉集で七首に用いられていながら、そこには

「月読の ひかり……」というほぼ同じ語構成になっているからであるが、その例にならない次の歌がある。

天橋も 長くもがも 高山も 高くもがも 月読の 持てるをち水 い取り来て 君に奉りて をちえてしかも

(十三・三三四五)

反歌

天なるや月日のごとく我が思へる君が日に異に老ゆらく惜しも (同・三三四六)

この引用歌は、中国の伝説にある西王母が仙薬を持っていたのを盗んだものがあって、月に行つた故事を踏まえている。すなわち、月の神が持っている若返りの水である「をち水」を取ってきて、あなたに差し上げたい、という願いを歌つたものである。「君」や「日に異に老ゆらく」などという言葉からは、お目出度い時に披露された寿歌であろう。すなわち、「月読」とは、ここでは神話の月神である。

死者と結びつくホトトギス歌で、さらに家持は月を登場させた。この月に向かって鳴くのは、月が人間の不死とかかわる「をち水」のある天体であるからではないか。その時は、月は「変若水」と関わる。即ち、死者と結びつくホトトギスが月に向かって鳴くのは、若返りための水を求めているのである。特に「ぬばたまの月に向かひて」(三九八八)は、月が不死と結びつくからである。

高市皇子が十市皇女が亡くなられたときに詠んだ、

山吹の立ち儀ひたる山清水酌みに行かめど道の知らなくに (二・一五八)

には、山清水とは山吹との組み合わせから、土居光知氏のいう生命復活の泉とも考えらそうであるが、工藤力男氏は、山中死人歌と文選挽歌の影響を認めているだけである。^(注17)

ホトトギスは、「古に恋ふらむ鳥」(二・一一二)であるのは、蜀王がホトトギスになって、「不如帰」と鳴き続けた故事による。ホトトギスは恋しい昔を再来させる「変若水」のある月に向かって昔が恋しいと鳴くのである。

四 航海の神

船団が斉明天皇七年(六六一)の正月に難波を出帆した。斉明天皇、中大兄皇子、大海人皇子らが乗り込んでいた。新羅に滅ぼされた百済救援のためであった。恐らく松山市にあった熟田津では、二ヶ月ほど滞在している。奈良時代の瀬戸内海航路の難波と大宰府間は一ヶ月ほどの航海であった。三月の中頃であろうが、額田王は有名な歌をうたう。この歌は、万葉集の月歌の初出である。

熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな(一・八)

どのような時に歌われたのか。夜の船遊びや、九州への船旅でないという考えもある。しかし、征西の雰囲気をもった歌としか考えられない。そこで月とは、弥生三月か蒼穹の満月か、潮とは、大潮の満潮か春の潮流か、といったことになる。資料、体験、或いは科学的なデータに基づいて説が打ち立てられた。研究史を踏まえて精緻な論を平舘英子氏が展開されていて有益である。^(注18)

さて、月夜の航海に参考にしたい歌が巻七に載せられている。

海原の道遠みかも月読の光すくなき夜は更けにつつ（二〇七五）

月は海原を通うのである。遙か遠い道のであるから、その遠くにいる時はまだ光が弱いと感じている。長い航海を経て月もやってきたらしい。天と海も「あめ」「あま」であるから、月は船にも喩えられ、あるいは月読の神になる。とすれば、額田王の「月」とは、月が長い天の海を航海していると考えられていたように、海原の航行の安全を祈る海神であつてよい。また、日本書紀第五段一書第六に「月読尊は、以て蒼海原の潮八百を治すべし」とあり、潮流の支配者として考えられていた。そこで、下田忠氏は、記紀の伝統である月読の神の存在から額田王八番歌と中大兄皇子の十五番歌とを、「西征の海路平穩を予祝する歌として詠まれた」とする。^(註19)万葉の天の原を航海する月の例からも、額田王の月の理解としては興味深い。

額田王を乗せた軍船の長い航海の安全を、引用した八番歌で月神に安全を祈り、潮流も適当になったのである。七世紀、八世紀の瀬戸内航路は早瀬では十ノツトの潮に翻弄され、帆走よりも漕走が主体であつても、土佐日記で貫之が述べた風と波がお友達であつたのであるから、「月待てば潮もかなひぬ」といっても命がけであつた。案外忘れてゐるのが霧の障害であつて、額田王の歌から約千二百年を経た慶応三年（一八六七）四月に坂本龍馬が乗つたいろは丸が衝突して、結局曳航されながら福山市鞆沖で沈没している。蒸気船同士の事故として、沈没事故は瀬戸内海で最初になる。額田王歌八番は、「月」と「潮」の解釈の例をしほつても異説が多い。

月が出ていれば明るいのであるから、風、波、霧の恐れが弱まる。月を待つとは、下田説の如く月に航海の安全を

祈るのである。さらに潮が適當になつたので出発する。ことさら満月、弥生三月などということは配慮するべきでないであろう。たまたま、三月中頃の出帆が予想される、或いは満潮が港から出発に便利であると言うことであろう。

さて、瀬戸内では、福山市鞆が海の中間であるから、その沖で満潮では東西の潮が集まり、干潮では潮が東西に分かれる。鞆は、万葉の歌枕であり、江戸時代の朝鮮通信使にも「日東第一」の風光と讃えられた。万葉集では、夜の航海がとりわけ珍しい。たまたまであるが、天平八年（七三六）の六月に瀬戸内を征西した遣新羅使の歌がある。巻十五に載せられた歌群には、神島（現在陸続きである福山市神島町）と長門島（倉橋島）で月夜の航海がうたわれている。

三五九九番は、神島出航のおりであり、題詞もないが、前後の歌の配列から、備後神島と判断されるし、三六二二番以下の三首は、長門の浦の出港である。長門の浦とは現在の呉市倉橋町本浦辺りであろう。

月読の光を清み神島の磯回の浦ゆ舟出す我は（三五九九）

長門の浦より舶出する夜に月の光を仰ぎ観て作る歌三首

月読の光を清み夕なぎに水手の声呼び浦回漕ぐかも（三六二二）

山のはに月傾けはいざりする海人の燈火沖になづさふ（三六二三）

我のみや夜舟は漕ぐと思へれば沖辺の方に梶の音すなり（三六二四）

万葉集では、夜の航海が珍しい。たまたま古代朝鮮に渡る船旅で共通するのであるが、天平八年（七三六）夏六月に瀬戸内を旅した遣新羅使の歌には、神島（福山市神島町）と長門島（呉市倉橋町）で試みられた。天と海も「あ

ま・あめ」であるから、月は船にも喻えられ、あるいは月読の神になる。とすれば、「月」と同様に「月読」とは、航海の安全を司る神であるから、旅人が祈る神でもよい。

月夜はどういう夜であつたのであろうか。簡便な灯りとしては松明程度であらう時代である。そもそも夜の外出としては、月夜が便利である。したがって月が天空にある日は、相聞歌をうたう大切な機会である。月明かりに照らされて外出するのである。闇夜ではままたない外出も月夜では自由になる。船旅でも灯火としては同様である。明るい月夜であるから出帆も可能なのであろう。しかし、月夜はいくらでもあつたはずなのに、出帆の用例が極めて乏しい。瀬戸内海の例であるならば、遣新羅使の二群の四首と額田王の熱田津歌の一首となる。夜の航海と言うことでどちらとも月がかかわる。遣新羅使の歌が「月読のひかり」(三六二)と月の神である「月読」にこだわりがある。額田王の八番でも月の神の加護がなければならなかった。即ち、月は航海の安全を司る神でもあつた。また、相聞歌の月も単純に明かりとするべき歌もあるであらうが、月が道を案内してくれる神と考えるべき歌もあるのであるまいか。

少なくとも夜の航海では、月と月読とは航海の神でなければならなかった。私は、遣遣新羅使の夜の船出は、一つが夏の昼間であれば暑さとの闘いもあり、その猛暑を避けたことと、もう一つがそれぞれの国で船員の交代があつて、その夜も航海するという意気込みを示したのである、と考えている。^{注20}夏の暑さの説明は必要ないが、船員は主要な船頭などを除き、国家的なことであり、それぞれの国の船員がその国で担当しているのであろう、と考える。安芸は安芸の船員が、周防は周防の水手が担当していたのであろう。備後と安芸は、その意味では、月夜の航海をして心意気をも示したのであろう。ところが、月が陰り、突風が吹くと恐ろしい波が立つ。その恐ろしさが使人に次の歌をうたわせたのである。

山のはに月傾けばいざりする海人の燈火沖になづさふ（十五・三六二三）

月を照明と考えるのもよいが、この月が傾いて闇夜になったが、それをやむを得ない夜という前提ではうたっていない。闇夜の恐ろしさが「海人の燈火沖になづさふ」とあって、灯火の明滅で突風と高波が生じたことが描かれ、そして闇夜の航海を恐れる心に昇華した。夜の航海では、月という航海の神に守られて旅をしている。月の神の加護を得て航海しているのである。

加えて大伴家と月は、もっと根源的に深く関わっていた事実がある。巻七にやはり興味深い歌が記録されている。

靱掛くる伴の緒広き大伴に国栄えむと月は照るらし（二〇八六）

一〇八六番を参考にすれば、大伴氏は月光を国家繁栄の象徴としていた。加えて月が航海の神として存在していたのであるから、

珠洲の海に朝開きして漕ぎ来れば長浜の浦に月照りにけり（十七・四〇二九）

という国守巡行に基づく家持歌は、照っていたことで月神に航海の安全を感謝していたのであり、さらに月光が越中能登国土繁栄を象徴していたのであるから、安堵と喜びの気持ちが入められた一首と見て良いことになる。

天平二十年家持三十一歳になっていた。赴任して三年目にしてやっと国守として初めて春出筈の旅が終わるのである。喜びと苦難に満ちた三百キロ、三週間程度にわたる越中と能登の旅であった。その最後にうたわれた歌に、月が

登場していても、それは氏としての伝統であつた繁栄の光であり、船旅として安心をもたらし存在であつた。

結　　び

月とは、花鳥風月と雪月花という雅な和歌の素材として共通になっている。月とは日本古典文学ではとりわけ雅なものとして重要な素材であつた。

ところがその雅なものでありながら、その歌のもつ特質に一步踏み込むとき、これまであまり強調されていなかった狂気をはらむ月の光、昔を再来させる「変若水」のある月、航海の安全を司る神という不思議な性格までも歌に取り入れていた。大伴家持は、月を照る、きよしと形容しても、けつしてさやけしなどと修飾することがなかった。これは、月の光に対するこだわりがあつた証左である。同じこだわりを示す大伴氏という名前には、きよき、さやけき、どちらも修飾語として用いているが、光に敏感であつた家持には、月の形容にはさやけしは思いつかない、あるいは忌避するべき言葉であつたのである。額田王を乗せた軍船もこれからの長旅の安全を引用した歌で月の神に祈願したかったのであろうし、加えて征西する潮流が適当になつたのであろう。

家持は、聴覚、視覚、嗅覚そして第六感などにもすぐれた歌人であつたが、月の光に關しては視覚の人であつた。ホトトギスの鳴き声に敏感であつたりするのは聴覚であらう。或いは風の音にも敏感であつたりするのは触覚であらうし、花の香りに鋭敏であつたりするのは嗅覚であらう。月を例にすれば、歌人大伴家持とは、光という視覚に敏感な風流士である。

注

注1

下田氏「万葉の月」(「福山市立女子短大紀要」十九号)

小野氏「万葉の月」(『天象の万葉集』高岡市万葉歴史館編所収)

注2

「星と星に関する物語」(『天象の万葉集』高岡市万葉歴史館編所収)

注3

万葉集の月歌百九十四首は、番号、作者、及び表現句を表として注の最後に載せる。(34頁)

注4

注釈書は、全て略称を用いている。

土屋私注

土屋文明著『万葉集私注』筑摩書房 昭和51年版

窪田評釈

窪田空穂著『万葉集評釈』東京堂出版 昭和59年版

岩波大系

『古典文学大系万葉集』岩波書店 昭和32年から

沢瀉注釈

沢瀉久孝著『万葉集注釈』中央公論社 昭和32年から

武田全註釈

武田祐吉著『増訂万葉集全註釈一』角川書店 昭和32年から

古典全集

『古典文学全集万葉集』小学館 昭和46年から

古典集成

『新潮古典集成万葉集』新潮社 昭和51年から

中西口訳注

中西進著『万葉集全訳注原文付』講談社 昭和59年

伊藤全注

伊藤博著『万葉集全注』有斐閣 昭和58年から

※但し、全注は、それぞれ巻に著者がいるので、卷十七では『橋本全注』などの略称を用いた。

新編全集

『新編古典文学全集万葉集』小学館 平成6年から

伊藤积注

伊藤博著『万葉集积注』集英社 平成7から

和歌文学大系

稲岡耕二著『万葉集』明治書院 平成9年から

新岩波大系

『新古典文学大系万葉集』岩波書店 平成11年から

全歌講義

阿蘇瑞枝著『万葉集全歌講義』笠間書院 平成18年から

注5

『万葉集全歌講義一』88頁

注6

『「さやけし」の周辺——「清なる自然」試論2——』(『万葉集の叙景と自然』所収) 304頁

- 注7 「大伴家持(4)」『吉野行幸を予想する歌』 160頁
- 注8 「セミナー万葉の歌人と作品(第十二卷)」 168頁
- 注9 「日本的感性」(中公新書「われの染め上げ7」) 141頁から144頁
- 注10 「俳諧大辞典」『岩波古典文学大辞典』などを参考として、俳諧美として纏めてみた。
- 注11 「大伴家持(1)」『おとめたちとの恋』 171頁から205頁
- 注12 「大伴家持研究」『女郎と娘子』 98頁
- 注13 岡田氏「山部赤人論(二)」——『赤人の歌四首』について——「『梅光女学院日本文学研究』十六号)
- 桜井氏「春の花」(『万葉の花』所収) 90頁
- 注14 「古典と日本人」(『古典と日本人 古典は語りかける』所収) 142頁から143頁
- 注15 「大伴家持(1)」『夏の歌』 113頁から140頁
- 注16 「大伴家持七夕歌の特質」(『広島女学院大学日本文学』十三号) も同じ内容である。
- 注17 土居氏「古代伝説と文学」『詩的心象の流転と古代・中世・二山吹の歌』で、「すなわち皇子は、生命を復活さす力のあ
る花が咲きそろって、その露がしたたる山清水を汲んで、姉君の生命を復活させたい」と述べている。81頁
- 注18 工藤氏「セミナー万葉の歌人と作品(卷十二)」 57頁
- 注18 「額田王論」(『セミナー万葉の歌人と作品(卷一)』所収) 但し、月については、航海の神と考える下田氏説の紹介をし
ていない。
- 注19 「万葉の月」(『福山市立女子短大紀要』十九号)
- 注20 拙論「遣新羅使夜の船出——長門の浦から麻里布へ——」(『広島女学院日本文学』十六号)「瀬戸内海の道——遣新羅使
の歌を中心に——」(『道の万葉集』高岡市万葉歴史館編所収)で、月夜の出発の事情を説明している。

万葉集の月歌

巻	番号	作者	巻	番号	作者	巻	番号	作者	
1	8	額田王	7	1084	山のはに / いさよふ月を	11	2665	月しあれば / 明るくむきつも	
	15	天智天皇		1085	木の閑より / 出で来る月に		2666	木の葉隠れる / 月待つごとし	
	48	柿本人麻呂		1086	国楽えむと / 月は照るらし		2667	居りし閑に / 月懐きぬ	
	79	朝月夜 / さやかに見れば		1179	浅茅が上に / 照りし月夜を		2668	二上に / 隠らふ月の	
2	135	柿本人麻呂	古歌集	1270	照る月は / 満ち欠けしけり	2669	2669	清き月夜に / 雲なたなびき	
	161	持統天皇		1294	人麻呂歌集		2670	まそ鏡 / 清き月夜を	
	167	柿本人麻呂		1295	三笠の山に / 月の舟出づ		2671	今夜の / 有明の月夜	
	169	柿本人麻呂		1372	み空行く / 月読をとこ		2672	月の空なる / 恋もすかも	
3	196	柿本人麻呂	1373	菅の根見むに / 月待ち難し	2673	2673	ぬばたまの / 夜渡る月の		
	207	柿本人麻呂		1374		いつしかと / 我が待つ月も	2679	恋結しに / 月おし照りて	
	211	柿本人麻呂	8	1452	紀女部	2811	2811	まそ鏡 / 照れる月夜も	
	214	柿本人麻呂		1480	大伴家持		2820	さ夜ふけて / 出で来ふ月の	
220	柿本人麻呂	1507		大伴家持	2821		木の閑より / うつろふ月の		
240	柿本人麻呂	1508		大伴家持	12		3002	山より出づる / 月待つと	
4	289	間人太清		1552	湯原王	3003	3003	夕月夜 / 晩閑の	
	290	間人太清	1569	大伴家持	3004	3004	照る月の / 失せなむ日こそ		
	302	安広安麻呂		1596	大伴家持	3005	3005	十五日に / 出でし月の	
	317	山部赤人		1661	紀女部		3006	月夜良み / 門に出で立ち	
5	388	庭待月 / 明石の門ゆは	9	1691	夜中にわきて / 照る月の		3007	3007	ぬばたまの / 夜渡る月の
	393	沙弥清誓		1701	閑こゆる空を / 月夜を見ゆ	3008		夕月を / いつかと君を	
	442	藤原王		1712	ぬばたまの / 夜渡る月の	3169		光にいませ / 月待ちがてり	
	495	田原稚子		1714	深める深に / 月の影見ゆ	3207		照る月の / 陰さる君や	
6	565	賀茂女王		1719	照る月を / 雲なげし	3208	3208	ひさかたの / 清き月夜も	
	571	大伴四郎	1761	朝月夜 / 明けまき月見	13	3231	月も日も / かはらひぬとも		
	623	池辺王		1763	夜隠りに / 出で来る月の	3234	3234	天地と / 日月と共に	
	632	源朝王		1807	望月の / 足れる面むに	3245	3245	月読の / 持てるを永水	
7	667	大伴上郎女	10	1874	夕月夜 / 清く照らるむ	14	3246	天なるや / 月日のごとく	
	670	湯原王		1875	夕月夜 / おほかたしも		3276	3276	月待つと / 人には言ひて
	671			1876	うつろふ月を / いつとか待たむ		3324	3324	望月の / たたはしけむと
	702	河内磐余子		1887	三笠の山に / 月も出でぬかも	3395	3395	小筑波の / 霧にそ月し	
8	709	大宅女	1889	毛織の下に / 月夜さし	3565	3565	宇良野の山に / 月片寄るも		
	710	安部孫麻呂		1943	月夜良み / ぬくほととぎす	15	3599	月読の / 光を清み	
	735	坂上大兄		1953	五月山 / 卯の花月夜	3611	3611	柿本人麻呂	
	736	大伴家持		2010	人麻呂歌集	3622	3622	月読の / 光を清み	
9	765	大伴家持		2025	人麻呂歌集	3623	3623	山のはに / 月隠れば	
	800	山上権良	2043	舟漕ぎ渡る / 月人をとこ	16	3650	ひさかたの / 天照る月の		
	892	山上権良		2051	白真弓 月人をとこ	3651	3651	ぬばたまの / 夜渡る月の	
	980	安倍虫麻呂		2131	月を良み / 雁が音聞こゆ	3658	3658	夕月夜 / 影立ち寄り合ひ	
981	大伴上郎女	2202		月人の / 風の枝の	17	3671	ぬばたまの / 夜渡る月の		
10	982	大伴上郎女	2223	月の舟浮け 月人をとこ	3672	3672	ひさかたの / 月は照りたり		
	983	大伴上郎女		2224	閑こゆる空ゆ / 月立ち渡る	3698	3698	天さかる / 隠れも月は	
	984	藤原朝臣		2225	さやかに見よと / 月は照るらし	18	3803	山のはに / 出で来る月の	
	985	源朝王	2226	心なき / 秋の月夜の	18	3900	大伴家持		
986	源朝王	2227		天雲はれて / 月夜さやけし	3955	3955	土師道良		
987	藤原八咫	2228		月夜の清き / 恋増さらくし	3988	3988	大伴家持		
993	大伴上郎女	2229		九月の / 有明の月夜	4029	4029	大伴家持		
11	994	大伴家持	2298	秋風吹きて / 月懐きぬ	18	4054	大伴家持		
	1008	忌部黒麻呂		2299		秋の夜の / 月かも君は	4060	4060	栗田女王
	1039	高丘内子		2300		九月の / 有明の月夜	4072	4072	大伴家持
	1068	人麻呂歌集		2306		しぐれ降る / 晩月夜	4073	4073	大伴家持
12	1069		2325	ひさかたの / 清き月夜に	19	4076	大伴家持		
	1070			2332		さ夜ふけて / 出で来む月を	4134	4134	大伴家持
	1071			2349		月夜良み / タク見せむ	4160	4160	大伴家持
	1072		11	2353		人麻呂歌集	4166	4166	大伴家持
1073		2420		人麻呂歌集	20	4177	大伴家持		
1074		2450		人麻呂歌集		4181	4181	大伴家持	
1075		2460		人麻呂歌集		4192	4192	大伴家持	
1076		2461		人麻呂歌集		4206	4206	大伴家持	
13	1077		2462	人麻呂歌集	20	4254	大伴家持		
	1078			2463		人麻呂歌集	4311	4311	大伴家持
	1079			2464		人麻呂歌集	4413	4413	大伴家持
	1080		2500	人麻呂歌集		4453	4453	大伴家持	
14	1081		2512	人麻呂歌集	4486	4486	大伴家持		
	1082			2618	人麻呂歌集	4489	4489	大伴家持	
	1083			2664	人麻呂歌集				